

B 教授の死

寺田寅彦

青空文庫

さわやかな若葉時も過ぎて、日増しに黒んで行く青葉のこずえにうつとうしい微温の雨が降るような時候になると、十余年ほど前に東京のSホテルで客死したスカンジナビアの物理学者B教授のことを毎年一度ぐらいはきつと思ひ出す。しかし、なにぶんにももうだ**い**ぶ古いことであつて、記憶が薄くなつてゐる上に、何度となく思ひ出し思ひ出ししてゐるうちには知らず知らずいろいろな空想が混入して、それがいつのまにか事実と完全**と**に融け合つてしまつて、今ではもうどこまでが事実でどこからが空想だかという境目がわからない、つまり一種の小説のような、というよりもむしろ長い年月の間に幾度となく蒸し返された悪夢の記憶に等しいものになつてしまつた。これまでもなんべんかこれに関する記録を書いておきたいと思ひ立つたことはあつたが、いざとなるといつでも何かしら自分の筆を洩らせるあるものがあるような気がして、ついついいつもそれなりになつてしまふのであつた。しかし、また一方では、どうしても何かこれについて簡単にでも書いておかなければ自分の気がすまないというような心持ちもする。それで、多少でもまだ事実の記憶の消え残つてゐる今のうちに、あらましのことだけをなるべくザハリツヒな覚え書きのような形で書き留めておくことにしようと思ふ。

欧州大戦の終末に近いある年のたぶん五月初めごろであつたかと思う。ある朝当時自分の勤めていたR大学の事務室にちよつとした用があつてはいつて見ると、そこに見慣れぬ年取つた禿頭とくとつのわりに背の低い西洋人が立つていて、書記のS氏と話をしていた。S氏は自分にその人の名刺を見せて、このかたがP教室の図書室を見たいと言つておられるが、どうしましようかというのである。その名刺を見ると、それはN国のK大学教授で空中室素の固定や北光の研究者として有名な物理学者のB教授であつた。同教授にはかつてその本国で会つたことがあるばかりでなく、その実験室で北光に関する有名な真空放電の実験を見せてもらつたり、その上に私邸に呼ばれてお茶のごちそうになったりしたことがあつたので、すぐに昔の顔を再認することができたが、教授のほうではどうもあまりはつきりした記憶はないらしかつた。

教授が今この図書室で見たいと言つた本は、同教授の関係した北光観測のエキスペジションの報告書であつたが、あいにくそれが当時のP教室になかつたので、あてにして来たらしい教授はひどく失望したようであつた。

それはとにかく、自分らの教室にとつては誠に思いがけない遠来の珍客なので、自分は急いで教室主任のN教授やT老教授にもその来訪を知らせ引き合わせをしたのであつたが、

両先生ともにいずれも全然予期していなかったこの碩学せきがくの来訪に驚きもしまた喜ばれもされたのはもちろんである。しかしB教授はどういうものかなんとなしに元気がなく、また人に接するのをひどく大儀はこねがるようなふうに見えた。

それから二三日たつて、箱根はこねのホテルからのB教授の手紙が来て、どこか東京でごく閑静な宿を世話してくれないかとのことであつた。たしか、不眠症で困るからという理由であつたかと思う。当時U公園にS軒付属のホテルがあつたので、そこならば市中よりはいくらか閑静でいいだろうと思つてそのことを知らせてやったら、さっそく引き移つて来て、幸いに存外氣に入つたらしい様子であつた。

その後、時々P教室の自分の部屋へやをたずねて来て、当時自分の研究していた地磁氣の急激な変化と、B教授の研究していた大氣上層における荷電粒子の運動との關係についていろいろ話し合つたのであつたが、何度も会つているうちに、B教授のどことなくひどく憂鬱ううつな憔悴しょうすいした様子がいつそうはつきり目につきだした。からだは相当肥ふとつていたが、蒼白な顔色にちつとも生氣がなくて、灰色のひとみの底になんとも言えない暗い影があるような氣がした。

あるひどい雨の日の昼ごろにたずねて来たときは薄絹にゴムを塗つた蟬せみの羽根のような

あまがいう
雨外套を着ていたが、蒸し暑いと見えて広くはげ上がった額から玉のような汗の流れるのをハンケチで押しぬぐい押しぬぐい話をした。細かい灰色のまばらな髪が逆立っているのが湯げでも立っているように見えた。その時だけは顔色が美しい桜色をして目の光もなんとなく生き生きしているようであった。どういふものかそのときの顔がいつまでもはつきり自分の印象に残っている。

一度S軒に呼ばれて昼飯をいっしょにごちそうになったときなども、なんであったか忘れたが学問には関係のないおどけた冗談を言ったりして珍しい笑顔^{えがお}を見せたこともあった。ある日少しゆっくり話したいことがあるから来てくれと言って来たのでさっそく行ってみると、寝巻のまま寝台の上に横になっていた。少しからだのぐあいが悪いからベッドで話すことをゆるしてくれという。それから、きょうはどうもドイツ語や英語で話すのは大儀で苦しいからフランス語で話したいが聞いてくれるかという。自分はフランス語はいちばん不得手だがしかしごくゆっくり話してくれればだいたいの事だけはわかるつもりだと言ったら、それで結構だと言ってぽつぽつ話したが、その話の内容は実に予想のほかのものであった。

自分にわかったただけの要点はおおよそ次のようなものであったと思う。しかし、聞き違

え、覚え違いがどれだけあるか、今となつてはもうそれを確かめる道はなくなつてしまつたわけである。

B教授は欧州大戦の刺激から得たヒントによつてある軍事上に重要な発明をして、まずF国政府にその使用をすすめたが採用されないので次に某国に渡つて同様な申し出をした。某国政府では詳しくその発明の内容を聞き取り、若干の実験までもした後に結局その採用は拒絶してしまつた。しかしどういふものかそれ以来その某国のスパイらしいものがB教授の身边に付きまつわるようになった、少なくともB教授にはそういうふうに感ぜられたそうである。その後教授が半ばはその研究の資料を得るために半ばはこの自分を追跡する暗影を振り落とすためにアフリカに渡つてヘルワンの観測所の屋上で深夜にただ一人黄道光の観測をしていた際など、思いもかけぬ砂漠さばくの暗やみから自分を狙撃そげきせんとするもののあることを感知したそうである。この夜の顛末てんまつの物語はなんとなくアラビアンナイトを思い出させるような神秘的なロマンチックな詩に満ちたものであつたが、惜しいことに細かいことを忘れてしまつた。

「それから船便を求めてあてのない極東の旅を思い立つたが、乗り組んだ船の中にはもうちゃんと一人スパイらしいのが乗つていて、明け暮れに自分を監視しているように思われ

た。日本へ来ても箱根^{はこね}までこの影のような男がつきまといて来たが、お前のおかげでここへ来てから、やっとその追跡からのがれたようである。しかしいつまでのがれられるかそれはわからない。」

「これだけの事を一度だれかに話したいと思っていたが、きょう君にそれを話してこれでやっと気が楽になった。」

ゆっくりゆっくり一句一句切って話したので、これだけ話すのにたぶん一時間以上もかかったかと思う。話してしまってから、さもがっかりしたように枕^{まくら}によりかかったまま目をねむって黙ってしまったので、長座は悪いだろうと思って遠慮してすぐに帰って来た。

翌朝P教室へ出勤するとまもなくS軒から電話でB教授に事変が起こったからすぐ来てくれとの事である。急病でも起こったらしいような口ぶりなので、まず取りあえずN教授に話をして医科のM教授を同伴してもらう事を頼んでおいて急いでS軒に駆けつけた。

ボーイがけさ部屋^{へや}をいくらたたいても返事がないから合いかぎでドアを明けてはいってみると、もうすでに息が絶えているらしいので、急いで警察に知らせると同時に大学の自分のところへ電話をかけたということである。

ベッドの上に掛け回したまっ白な寒^{かん}冷^{れい}紗^{しゃ}の蚊帳^{かや}の中にB教授の静かな寝顔が見えた。

枕^{まくら}上^{がみ}の小卓の上に大型の扁^{へん}平^{ぺい}なピストルが斜めに横たわり、そのわきの水飲みコップの、底にも器壁にも、白い粉薬らしいものがべとべとに着いているのが目についた。

まもなく刑事と警察医らしい人たちが来て、はじめて蚊帳を取り払い、毛布を取りのけ寝巻の胸を開いてからだじゅうを調べた。調べながら刑事の一人が絶えず自分の顔をじろじろ見るのが気味悪く不愉快に感ぜられた。B教授の禿^{とく}頭^{とう}の頂上の皮膚に横にひと筋紫色をしてくぼんだ跡のあるのを発見した刑事が急に緊張した顔色をしたが、それは寝台の頭部にある真^{しん}鍮^{ちゆう}の横わくが頭に触れていた跡だとわかった。

刑事が小卓のコップのそばにあつた紙袋を取り上げて調べているのをのぞいて見たら、袋紙には赤インキの下手^{へた}な字で「ペロナール」と書いてあつた。呼び出されたボーイの証言によると、昨夜この催眠薬を買って来いというので、一度買って帰ったが、もつとたくさん買って来いという、そんなに飲んだら悪いだろうと言ってみたが、これがないと、どうしても眠られない、飲まないと気が違いそうだからぜひにと嘆願するので、しかたなくもう一ぺん薬屋にわけを話して買って来たのだということであつた。

そのうちにN教授とM教授がやって来た。続いてN国領事のバロン何某と中年のスカンジナビア婦人が二人と駆けつけて来た。婦人たちがわりに気丈でぎょうさんらしく騒がな

いのに感心した。

室の片すみのデスクの上に論文の草稿のようなものが積み上げてある。ここで毎日こうして次の論文の原稿を書いていたのかと思つて、その一枚を取り上げてなんの気なしにながめていたら、N教授がそれに気づくと急いでやつて来て自分の手からひったくるようにそれを取り上げてしまった、そうしてボーイを呼んでその原稿いっさいを紙包みにしてひもで縛らせ、それを領事に手渡しした。そうして、それを封印をして本国大学に送つてもらいたいというようなことを厳肅な口調で話していた。

領事のほうからは、本国の家族から事後の処置に関する返電の来るまで遺骸いがいをどこかに保管してもらいたいという話があつて、結局M教授の計らいでM大学の解剖学教室でそれを預かることになった。

同教室に運ばれた遺骸に防腐の薬液を注射したのは、これも今は故人になったO教授であつた。その手術の際にO教授が、露出された遺骸の胸に手のひらをあてて *Noch warm!* と言つて一同をふり向いたとき、領事といっしょにここまでついて来ていた婦人の一人の口からかすかなしかし非常に驚いたような嘆声もれた。O教授はしかし「これはよくあるポストモルテムの現象ですよ」と言い捨てて、平気でそろそろ手術に取りかかった。

葬式は一番町いちばんちょうのある教会で行なわれた。梅雨つゆ晴れのから風の強い日であつて、番町へんといったいの木立ちの青葉が悩ましく揺れ騒いで白い葉裏をかえしていたのを覚えてゐる。自分は教会の門前で柩きゆうしや車を出迎えた後霊柩に付き添つて故人の勲章を捧持ほうじするといふ役目を言いつかつた。黒天鵲くろびろうど絨のクシヨンのまん中に美しい小さな勲章をのせたのをひもで肩からつり下げそれを胸の前に両手でささげながら白日の下を門から会堂までわずかな距離を歩いた。冬向きにこしらえた一ちようらのフロックがひどく暑苦しく思われたことを思い出すことができる。

会堂内で葬式のプログラムの進行中に、突然堂の一隅いちぐうから鋭いソプラノの独唱の聲が飛び出したので、こういう儀式に立ち会つた経験をもたない自分はかなりびっくりした。あとで聞いたたら、その独唱者は音楽学校の教師のP夫人で、故人と同じスカンジナビアの人だという縁故から特にこの日の挽歌ばんかを歌うために列席したのであつたそうである。ただその声があまりに強く鋭く狭い会堂に響き渡つて、われわれ日本人の頭にある葬式というもの概念に付随したしめやかな情調とはあまりにかけ離れたもののような気がしたのであつた。

遺骸いがいは町屋まちやの火葬場で火葬に付して、その翌朝T老教授とN教授と自分と三人で納骨に

行つた。炉から引き出された灰の中からはかない遺骨をてんでに拾いあつめては純白の陶器の壺に移した。壺に移した。並みはずれに大きな頭蓋骨の中にはまだ燃え切らない脳髓が漆黒なアスファルトのような色をして縮み上がっていた。

N教授は長い竹箸でその一片をつまみ上げ「この中にはずいぶんいろいろなえらいものがはいっていったんだなあ」と言いながら、静かにそれを骨壺の中に入れた。そのとき自分の眼前には忽然として過ぎし日のK大学におけるB教授の実験室が現われるような気がした。

大きな長方形の真空ガラス箱内の一方にB教授が「テレラ」と命名した球形の電磁石がつり下がっており、他の一方には陰極が挿入されていて、そこから強力な陰極線が放射されると、その一道の電子の流れは球形磁石の磁場のためにその経路を彎曲され、球の磁極に近い数点に集注してそこに螢光を発する。その実験装置のそばに僧侶のような黒頭巾をかぶったB教授が立つて説明している。この放電のために特別に設計された高圧直流発電機の低いうなり声が隣室から聞こえて来る。

そんな幻のような記憶が瞬間に頭をかすめて通つたが、現実のこの場面はスカンジナビアとは地球の反対側に近い日本の東京の郊外であると思うと妙な気がした。

それからひと月もたって、B教授の形見だと言ってN国領事から自分の所へ送って来たのは大きな鑄銅製の虎とらの置き物であった。N教授の所へは同じ鑄物の象が来たそうである。たぶんみやげにでもするつもりでB教授が箱根はこねあたりの売店で買い込んだものであつたのかと思われた。せつかくの形見ではあるがどうも自分の趣味に合わないの、押し入れの中にしまい込んだままに年を経た。大掃除おおそうじのときなどに縁側に取り出されているこの銅の虎を見るたびに当時の記憶が繰り返される。大掃除の時季がちょうどこの思い出の時候に相するのである。

S軒のB教授の部屋へやの入り口の内側の柱に土佐特産とさの尾長鶏おながどりの着色写真をあしらった柱暦のようなものが掛けてあつた。それも宮みやの下あたりで買ったものらしくたが、教授のなくなった日、室のボーイが自分にこの尾長鶏を指さしながら「このお客さんは、いつも、世の中にこのくらい悲惨なものはないと言っていましたよ」と意味ありげに繰り返して話していた。しかしなぜ尾長鶏がそんなに悲惨なものかとB教授に思われたか、これが今日までもどうしても解けない不思議ななぞとして自分の胸にしまい込まれている。

ボーイについて思い出したことがもう一つある。やはりこの事変の日に刑事たちが引き上げて行ったあとで、ボーイが二三人で教授のピストルを持ち出して室の前の庭におりた。

そうして庭のすぐ横手の崖^{がけ}一面に茂ったつつじの中へそのピストルの弾^{たま}をぽんぽん打ち込んで、何かおもしろそうに話しながらげらげら笑っていた。つつじはもうすっかり散ったあとであつたが、ほんの少しばかりところどころに茶褐色^{ちやかっしょく}に枯れちぢれた花卉のなごりがくつついていたことと、初夏の日ざしがボーイのまっ白な給仕服に照り輝き、それがなんとも言えないはかない空虚な絶望的なものの象徴のように感ぜられたことを思い出すのである。

（昭和十年七月、文学）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第五卷」岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年11月20日第1刷発行

1963（昭和38）年6月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：多羅尾伴内

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

B教授の死

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>